

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

受賞おめでとうございます

金 賞



「世界環境ラジオフォーラム 開催」
富山県富山大学附属富山中学校3年
梶原 悠生



ファストファッションの 行方から考える
Sage Center International School 1年
加藤 志季



地球に恩返しを
長野県上田市立第五中学校1年
橋田 杏



「みんなであつくる地球」
長野県長野市立山中学校3年
黒川 海空



台所から始めてみよう
埼玉県奥州市立水沢中学校3年
竹花 紀慧



地産地消で明るい未来を
愛媛県愛南町立御荘中学校3年
古川 夏羽



つだけゴミを 拾ってみませんか？
愛媛県西条市立西条中学校2年
村上 瑞梨



未来を救う
福岡県福岡市立西尾中学校1年
山崎 陽向



エシカルなカエルに なるために。
埼玉県熊谷市立熊谷中学校3年
湯本 千穂



里山の魅力の復活を
兵庫県明石市立明石中学校3年
吉岡 明衣子

銀 賞



エアコンと地球温暖化の 負の連鎖
北海道札幌市立大学中学校2年
井川 ありす



小さなこだわりが世界を 変えることを知った
長野県上田市立第四中学校2年
石井 湊士



旅先から学ぶ
神奈川県横浜国立大学付属横浜中学校2年
今井 康太



「エシカル」の視点を持つ
山口県萩市立旭陽中学校1年
岡本 唯花



継続的な学習基盤が 未来を変える
ソウル日本中学校3年
五味 愛琳



「おもてなし」の意識を変える
群馬県伊勢崎市立堀内中学校3年
塩尻 彩月



環境の現状と 私たちにできること
福岡県北九州市立高井中学校3年
高須賀 穂子



自然と共生するために
岩手県立岩手高等学校附属中学校3年
遠澤 聖子



おいしく食べるエコになる
大阪府貝塚市立第五中学校1年
富田 昌希



意識と疑問を持ち続ける
愛媛県今治市立南陽中学校3年
渡邊 琉愛

銅 賞



身近なことから
熊本県熊本市立力台中学校2年
石田 昌陽



自然の破壊
岩手県立岩手高等学校附属中学校3年
及川 純伶



守ろう！地球の生態系
富山県上田市立市立中学校2年
齊藤 綾香



多目的にそして未来に
栃木県宇都宮市立栗山中学校1年
鈴木 透真



山の環境問題への 山小屋の取り組み
兵庫県西宮市立西宮中学校3年
遠可くるみ



今私達にできることを
茨城県古河市立昭和中学校2年
中村 紀朱莉



ゴミが落ちていない 世界に向けて
福岡県糟屋郡宇美町立宇美中学校1年
福岡 星那



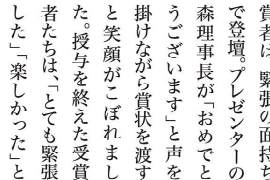
小さな「出来ること」
東京都田舎町立田舎町中学校2年
福本 莉奈



海の宝から学んだこと
高知県高知市立高知高等学校附属中学校3年
宮本 優花



プラスチックに 地球の未来
北海道札幌市立大学中学校2年
山岸 莉音



会場に集まったのは受賞者と保護者の皆さんです。式典は厳かに始まり、主催者代表の公益財団法人イオンワンパーセントクラブの森美樹理事長のあいさつに続いて、審査員が紹介されました。いよいよ賞状授与です。名前を呼ばれた受賞者は、緊張の面持ちで登壇。プレゼンターの森理理事長が「おめでとうございます」と声を掛けながら賞状を渡すと笑顔がこぼれました。授与を終えた受賞者たちは、とても緊張した「楽しかった」と

会場に集まったのは受賞者と保護者の皆さんです。式典は厳かに始まり、主催者代表の公益財団法人イオンワンパーセントクラブの森美樹理事長のあいさつに続いて、審査員が紹介されました。いよいよ賞状授与です。名前を呼ばれた受賞者は、緊張の面持ちで登壇。プレゼンターの森理理事長が「おめでとうございます」と声を掛けながら賞状を渡すと笑顔がこぼれました。授与を終えた受賞者たちは、とても緊張した「楽しかった」と

公益財団法人
イオンワンパーセントクラブ
理事長 森 美樹

7787名というたくさんの応募者の中から選ばれた金賞10名の方、ご家族の皆さん、本当におめでとうございます。ご支援いただいた学校の先生方、そして多くの作品を審査していただいた審査員の皆さんに、御礼申し上げます。

イオンワンパーセントクラブは三つの柱で活動しています。一つめはこの中学生作文コンクールを含む「子どもたちの健全な育成」です。二つめは「諸外国との友好親善」で、アジアの諸国の方々と日本の高校生が一緒に活動をしてい

保護者の皆さんと喜びを分かち合っていました。最後に審査員から受賞者へのお祝いの言葉と講評があり、表彰式は閉会となりました。保護者からは、「すばらしい表彰式だった」「子どもの成長を感じることができてよかった」という声がありました。

「中学生作文コンクール」は、多感な時期にいわれる中学生の皆さんが環境問題をテーマに作文を書くことで、自分自身の考えをまとめ、相手に伝える力を養うことを目的に2003年から実施しています。

地球温暖化にともなう気候変動やプラスチックごみによる海洋汚染などの環境問題は、修復不能な事態まで来ているといわれ、問題解決の

保護者の皆さんと喜びを分かち合っていました。最後に審査員から受賞者へのお祝いの言葉と講評があり、表彰式は閉会となりました。保護者からは、「すばらしい表彰式だった」「子どもの成長を感じることができてよかった」という声がありました。

「中学生作文コンクール」は、多感な時期にいわれる中学生の皆さんが環境問題をテーマに作文を書くことで、自分自身の考えをまとめ、相手に伝える力を養うことを目的に2003年から実施しています。

地球温暖化にともなう気候変動やプラスチックごみによる海洋汚染などの環境問題は、修復不能な事態まで来ているといわれ、問題解決の

保護者の皆さんと喜びを分かち合っていました。最後に審査員から受賞者へのお祝いの言葉と講評があり、表彰式は閉会となりました。保護者からは、「すばらしい表彰式だった」「子どもの成長を感じることができてよかった」という声がありました。

「中学生作文コンクール」は、多感な時期にいわれる中学生の皆さんが環境問題をテーマに作文を書くことで、自分自身の考えをまとめ、相手に伝える力を養うことを目的に2003年から実施しています。

地球温暖化にともなう気候変動やプラスチックごみによる海洋汚染などの環境問題は、修復不能な事態まで来ているといわれ、問題解決の



主催／公益財団法人イオンワンパーセントクラブ

後援／文部科学省 環境省 朝日中高生新聞

第21回 中学生作文 コンクール 表彰式

テーマ
地球環境のために今できること

7787点の作品が寄せられました

昨年の11月25日に、第21回「中学生作文コンクール」の表彰式が東京都内で開催されました。環境保全につながる自分の考えや、日頃から取り組んでいる行動を表現した作文がたくさん寄せられました。審査員による厳正な選考の結果、金賞、銀賞、銅賞の各10作品が決定しましたので、紹介します。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第21回 中学生作文コンクール



「世界環境
ラジオ・フォーラム開催」

富山県 富山大学教育学部附属中学校 3年

梶原 悠生



私が住む富山県は、富山湾は「天然のいけす」と呼ばれるほど魚の種類が豊富な海で、私にとっては自慢の場所です。しかし、世界に目を向けると、今、海では大変なことが起こっています。2008年にはカナダの海で、クジラの種類であるイッカクが1000頭以上死んだという報告がありました。原因としては、海底調査に用いられるエアガンの騒音がイッカクの行動パターンを狂わせたためと考えられています。また2022年には、地中海にある黒海で、延べ2500頭以上のイルカの死骸が打ち上げられているのがニュースになりました。ウクライナ侵攻により、黒海を航行するロシア軍艦に備えられていたソナーがイルカの聴力に影響を与えた可能性がある」と専門家は指摘しています。海での音の研究が進む昨今、船舶騒音や潜水艦の探知ソナーなど、海がどんどんうるさくなっていることが分かってきました。海洋生物を守るためには、騒音との関係について、もっと調べる必要があります。海洋生物の危機を知る必要があります。

そこで私は、昨年度から富山高等専門学校先生と一緒について、プラスチックの模型船を使って実験を行っています。富山湾で先生と一緒に船を釣つてきて、富山高専の練習船のエンジン音を収録し、魚に聴かせて反応を調べる実験を実施するなど、様々な知見を得てきました。実験を発表する場にも恵まれ、全国の研究者の方にも研究発表を聴いてもらいました。

しかし、海洋生物を騒音から守る研究は、マイナーな部類の研究であることを知り、金にならない、予算がつかない研究だから、私はもどかしさを感じました。利益をうむ研究だけが優遇されるのはおかしいと思いました。このままでは、海洋生物を騒音から守る研究は見向きもされず、海を守るができなくなってしまうと思います。今こそ世界中の人間たちが海の騒音や異変を知

(参考文献:朝日新聞GLOBE+ 2019年2月27日の記事より) <https://globe.asahi.com/article/12167253>

受賞した
感想

受賞を知ったときはうれしかったです。富山県は魚がおいしいところです。私は魚が好きなので、地球温暖化や人間の活動、戦争などにより海の豊かさが削られていることを知ってもらうために作文を書きました。



ファストファッションの
行方から考える

アメリカ Space Center Intermediate School 1年

加藤 志季



私は、父の転勤で5月からアメリカで生活している。夏休み、近くの教会で不要になつて持ち込まれた古着を分けて、仕分けするボランティアに参加した。新たに使用してくれる人に譲るための作業だったが、持ち込まれる衣類の量に驚いた。それより驚いたことは、譲るとはいえ、まだ新品ではないのかと思われる衣類があまりにもたくさんあったことだった。私は無駄に捨てられている衣類の現状に気がなり、調べてみることにした。

そのなかで、南米チリの砂漠には不要になった服が大量に捨てられている、ファストファッションの墓場が急速に拡大している、という記事を見つけた。これらの服は、中国やバングラデシュで作られ、アメリカやヨーロッパ、アジアへと運ばれたものだそうだが、これらの地域で売れ残った服や使用済みになった洋服、約5万9000トンがチリの港に運ばれてくる。ラテンアメリカの国々で再び売られるが、3万9000000トンはいったのだが、自分で悩んで生

砂漠の廃棄場に捨てられていく。流行の服を大量に生産し、短いサイクルで販売する。新しい洋服を買ったりお洒落を楽しむことは、私たちの個性を表現でき、心も豊かにしてくれる、大切なものの一つであることは間違いない。そのなかで、ファストファッションは、手軽にお洒落を楽しむ利点があると思う。しかし、技術面で進んでいる先進国側でさえも、大量に余っている古着を処理しきれないのだから、ごみ処分場などの施設が不十分な発展途上国で、大量の古着を処理することは到底できないことは、想像ができる。ファストファッションがもたらした問題を解決する答えは、ファストファッションを着ないことではないと思う。問題なのは、安いから・流行だからという理由で服を買って、愛着がもたず、捨てることへのためらいがなく、大切にする「念い」をもつことが重要だと考える。

(参考文献:エレン・マッカーサー財団HPより) <https://www.ellenmacarthurfoundation.org/>

受賞した
感想

アメリカから応募をする機会を与えて頂き、結果として金賞を受賞することができた事大変うれしく思っています。作文で1番に伝えたかった、ものを大切に「念い」をもち行動していくことはファストファッションの問題だけではなく、未来の地球環境を守る為にも繋がっていく重要なことの1つだと思っています。今回の賞を励みに、英語の勉強だけではなく、文章を書くことも引き続き頑張りたいと思います。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第21回 中学生作文コンクール

金賞

地球に恩返しを

長野県 富士見町立富士見中学校 1年

橘田 杏



私の家では、2年ほど前から地球環境のためにあることを行っています。それは「ゴミの分別」と「生ゴミを肥料に変えること」です。

この2つを始めたきっかけは、小学5年生のときにやった自由研究です。「エコクッキング」という題名でカレーライスを作りました。内容は普通に作ったカレーライスと、野菜の皮を使ったり、お米を研いだ水でお皿を洗うなどとして作ったエコなカレーライスで比較しました。私はそれぞれのゴミの量の違いを見て驚きました。それから私は身の回りの「エコ」を見つけ、家でも行いました。生ゴミを肥料に変えようと、毎年野菜を育てるために使う肥料代が減ります。ゴミを分別すれば、プラスチックはリサイクルすることができ、燃やして出る排出ガスが少なくなります。他にもたくさんエコな工夫があります。

家では、2年ほど前から地球環境のためにあることを行っています。それは「ゴミの分別」と「生ゴミを肥料に変えること」です。私の家では「ゴミの分別」、私の家のようにエコな生活をしている人は多いと思います。学校でも「地球温暖化」について勉強しました。そのなかで、自分の家で行っていることに丸をしなさいというものがありません。やってみたら、そこそこエコな生活を送っていることがわかりました。そして、できるだけリサイクル製品を買うようにしています。1つ目の「できるだけリサイクル製品を買うようにしている」は今まで意識していませんでした。2つ目の「入浴は家族の時間に合わせる」は、お父さんが夜お風呂に入っているのを見て、これからは夕食や、勉強など全て終わらせてから入浴できるように心がけたいです。ゴミの分別と生ゴミを肥料に変える以外でも私の家で最近始めたことがあります。



受賞した感想

小学校5年生の自由研究でエコについてまとめたことがきっかけで、今回の作文を書こうと思いました。学校で給食の時間に受賞を知らされました。みんなが「おめでとう」と言ってくれて、とてもうれしかったです。

金賞

「みんなでつくる地球」

長崎県 長崎市立山里中学校 3年

黒川 海空



ここに一枚の浴衣がある。曾祖母の紫色の藤の花の柄。祖母、母と引き継がれた浴衣。大切に保管されていた。少し古風な浴衣。暑い夏の真っ只中、私は花火大会に着ていくか否か考えていた。それにしても暑い。今年は熱中症で命を落とすケースも多い。洪水、台風、干ばつ、豪雪など、一年を通して見られる気候変動。いや、これは気候危機だ。気象庁のデータを見ると、世界の平均気温は長期的に上昇している。特に日本の年平均気温偏差は近年+0.6℃上回っており、世界の上昇値よりも高い。私は責任を感じずにはいられなかった。地球温暖化の最大の原因は温室効果ガスの二酸化炭素だ。私達の快適な生活が原因を作っているのだ。更に、家庭からの排出は増加傾向にある。もともと環境に目を向け、自分事として捉え、地球に住む者として責任感と危機感を持たなければならぬ。

そこで今年の夏は地球のために「むやみにしない」取り組みを考えた。

- ① 水を使わない
- ② 冷蔵庫を開けない
- ③ レジ袋を使わない
- ④ 食べ残しを出さない
- ⑤ 車に乗らない

の五項目だ。簡単だが、中学生の私にもでき、継続可能な取り組みだ。約二か月続けてみて、手ごたえを感じ取りにくいことに気づいた。CO2は見えない。この取り組みで削減した量なんて測れない。しかし、私の意識は確実に変わった。車を使わないことで、ガソリンの原料である石油の節約になり、資源を守ることになる。CO2を出さない取り組みは、同時に資源を守り、生態系を侵さないことにも繋がる。更に、家庭の経費削減にもなる。日に見えないことでも、環境を守ることに繋がっている。諦めてはいけぬ。循環型社会という言葉を身近に感じた。CO2の増加は自然に悪影響を与え、負の連鎖を起す。しかし、環境によいプラスの連鎖も起こせるのではないだろうか。人も同じだ。この地球を祖先から受け継ぎ、私達がいる。地球を大切に、

次の世代に引き継ぐという気持ちも循環しているのだ。「フードドライブ」「手前取り」など、持続可能な未来を見据えた取り組みが浸透している。私が住む長崎には「ながら環境都市宣言」と人と自然と文化が輝き続けるまち「長崎」というものがある。きれいな空気と水、豊かな生き物を大切に、次の世代へ美しい地球を引き継いでいくのは私達の責任だ。確実に社会は動いている。行動に移すのは私達だ。環境問題に必要なのは周りの思いやる心ではないだろうか。環境を、生きものを、人を思いやり生きていく。人ひとりが地球をつくる当事者として、現状を知り、考え、行動する。小さな行動が大きな力を生み出す。物を捨てるか否か。新しい物を買うか否か。私は曾祖母の浴衣を見ながら、大切にしたいと思う気持ちに誇りを持って、地球のために優しい選択をしようとする心が私たちの地球をつくる。

(参考文献:気象庁HPより) https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/temp/an_jpn.html

受賞した感想

昨年のエコツアーに参加して、環境の現状を知ることができました。また作文を書いて発信することができたらしいと思います。自分の作文によって環境問題が少しでも良くなるならうれしいです。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

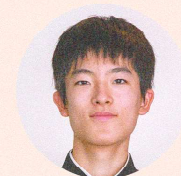
第21回 中学生作文コンクール



台所から始めてみよう

岩手県 奥州市立水沢中学校 3年

竹花 紀慧



「ふりそそぐ日の光 月影のせて 川は北上 ゆたかに流れ」※1
「流れてつきぬ 北上川 胆沢川」※2
これは僕たちの母校の校歌の一部だ。生活を支え、風景の一部になっている大切なものだからなのだと思う。
北上川の源流に行った。静かな境内にある大木の根本から流れ出る小さな流れ。夏でも冷たく、口にするやわらかさを感じる。生命を育む源であることを実感した。追波湾に注ぐ河口へ向かった。川幅は広い。途中でたくさんさんの出畑を潤したその流れは、太陽を受けて輝き、おだやかだった。
僕は毎年水質調査に参加している。今年も水質階級Iだったが、これが続くとは限らない。なぜなら、北上川は四十年ほど前「死んだ川」と言われていた時期があったからだ。鉱山から出る強酸性坑産水で川は赤く染まり、生き物がすめなくなってしまうのだ。きれいな川は当たり前でないことを感じる。
また、川の水質汚染の原因の二つに生活排水がある。そう。思い当たることがある。調味料がついた皿や牛乳が少し残ったコップをそのまま洗ってしまうことがあることだ。
台所と川はつながっているのだ。そして、海へつながっているのだ。
台所とつながっている問題で、もう一つ気になっていることがある。食品ロスが二酸化炭素を増やしているということだ。どういうことか調べてみた。食べ残されるなどした食品はトラックで運ばれ、可燃ごみとして焼却されるからだそう。その二酸化炭素排出量は年間約三十七億トン。総排出量の約8パーセントを占めるという。これも思い当たることがある。うちは食べ残しはほとんどないが、気づかずに賞味期限切れしてしまった冷凍食品や保存食、開けたまま古くなってしまうジャムなどを廃棄することがあることだ。
台所と世界はつながっているのだと思う。
その他、海のマイクロプラシック問題、排気ガスによる大気汚染など喫緊の課題は多い。でも、対象は地球。規模が大き過ぎて何もできないと思えていたが、このまま温暖化が進んでしまつたら、この風景が変わってしまうかもしれない。さらに、大好きなスキーをしたり新巻鮭やリngoを食べたりすることができなくなってしまうかもしれない。自分事として考え、できることがたくさんあるように思える。皿に残った調味料をふいてから洗うこと、洗剤は使い過ぎないこと、食べ物を大切にすること。まず台所など身近なところから実践していこうと思う。
僕たちにできることは小さく、すぐに結果は出ないけれど、それが、将来の大きな成果につながる。そして、僕たちの生活は自然に影響を与えることを忘れてはいけないと思う。
全ては僕たちの手元から始まっています。みんなでこの風景を未来へ届けませんか。

(※1 奥州市立水沢中学校校歌 ※2 奥州市立水沢小学校校歌) (参考文献: Our World in Data HPより) <https://ourworldindata.org/>



部活(科学部)の先生にコンクールのことを紹介してもらい、書いてみようかなくらいの気分で取り組みました。先生から電話で受賞を知らされたときは、入賞すると思っていたなかったので、すごくうれしかったです。



地産地消で明るい未来を

愛媛県 愛南町立御荘中学校 3年

占川 夏羽



あなたが今日食べた食材の旬はいつですか。最近ではハウス栽培などの技術の発達により、季節を気にせず手に入られるようになった食材。しかし、これにはデメリットが二つあります。一つは、エネルギー消費の大きさです。ハウスの栽培のきゅうりは、露地栽培のものに比べて約五倍のエネルギーを消費します。もう一つは、温室効果ガスの排出です。ハウス内の温度管理などに使われる電力が大きな原因となり、地球温暖化につながることで、野菜は旬の時期には味がおいしくなるだけでなく、含まれる大切な栄養素の量もぐっと増えます。旬の野菜を食べることで、おいしく健康に、そして、地球にやさしい食生活を送ってはどうでしょうか。これなら少し意識すれば、どの人にもできそうです。
今回私は、食材が食卓に届くまでの旅にも注目しました。ある日の夕食「今日はカレーにしよう」と決めたら、多くの人はスーパーで食材を購入すると思います。そのとき、生産地から消費地までの輸送によって二酸化炭素などの温室効果ガスが排出されます。国産よりも外国産の方が当然、温室効果ガスの排出量が多くなります。日本産の食材で全てをまかなうことができた方がいいのですが、二〇二〇年の日本の食料自給率は37%ととても低く、先進国二十九か国中、26位なので、自給率を高めることは欠かれません。このことから地元で生産された食材を地元で消費する「地産地消」の大切さが分かります。
私の家では毎年ゴーヤのグリーンカーテンを作っていて、野菜はゴーヤときゅうり、花は朝顔とフウセンカズラを育てています。このグリーンカーテン作りは、十年続く我が家の恒例行事です。家族と楽しみなが野菜を栽培し、地球温暖化の抑制に貢献できているので、我が家の小さな自慢です。
しかし、これからの私たちの食生活は大きく変化することと言われています。食べることが好きな私は、普段おいしい食を食べているものが食べられなくなると考えると、何とかならないかと思っています。その代表例が寿司です。海流の上昇により寿司ネタに欠かせない魚介類が日本の海で生育できなくなるそうです。三十年後にはサケ、イクラ、さらに三十年後にはホタテ、ウニも消えていく可能性があります。私たちは子どもや孫たちに「昔はもつと色々なネタがあったんだよ」と話す日は、確実に近づいてきています。そのことを多くの人に知ってもらい、対策してほしいのです。
私たちよりもずっと先の世代が、私たちと同様に地球からの恩恵を受け、豊かな生活を送れるように努力するのは私たちの使命です。一人ひとりにできることは限られていますが、それを実践し積み重ねていくことで、きっと未来は変えられる。だから我が家では、グリーンカーテンと旬を感じる豊かな食事、地産地消で地球にやさしい生活を心掛けています。

(参考文献: 株式会社ヨロチョーHPより) <https://www.yorochou.com/business/farm/>



受賞の知らせを受け、家族みんなで喜びました。私はバスケットボール観戦が趣味です。好きなチームがSDGsのプロジェクトをやっていたので環境問題に興味を持ち、作文を書いてみようと思いました。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第21回 中学生作文コンクール

金賞

一つだけ、
ゴミを拾ってみませんか？

愛媛県 西条市立西条東中学校 2年

村上 瑠梨



ある日、父がゴミ拾いをしようとしてきた。最初は父が思いついて言っているだけだ」と思い、散歩気分で行った。やっぱりやり始めは、「ちよつと面倒だな」と思いつつ、ゴミを拾っていた。近所をちよつと歩いただけで、ゴミ袋の半分も集まった。それだけ近所には「自分だけなら拾っていいよな」「ゴミがあるけど、拾うの面倒だな」と思っている人が多いと感じ、自分も落ちているゴミを見て見ぬふりをしていた自分が情けなかった。

父がなぜ急にゴミ拾いを始めたのかは気になり、たずねてみると「生まれてからずっと西条に住んでいるから、何か西条市を良くして、地球温暖化防止にもつなげたい」と思い、始めやすく、続けやすいものを探したところ、ゴミ拾いに決めた」とそうだ。

西条市には「さいじょうまち美化パートナー制度」というものがある。この制度は道路や川、公園などの環境美化活動をボランティアで行う

団体を募り、市と協力して地域の美しい環境づくりをすることが目的の制度である。父が、この制度に賛同し、ボランティア団体を作り、加入した。団体の一員である私も、定期的にゴミ拾いを始めた。そして、やっているうちに次第に楽しくなってきた。徒弟も楽しそうにゴミ拾いを手伝ってくれた。だつて楽しいんだもん！近所もよく見るとゴミが多いけど、何かのメダルや、あけてでもない缶コーヒー、一口も飲んでない水など、おもしろいゴミもたくさんあった。おもしろいといえど、近所でゴミ拾いをしていくと、乳酸菌飲料の「ビルク」がちよつと進んだら落ちていて、またちよつと進んだら落ちていて、合計五つも落ちていて、みんなで大笑いしながら作業をした。あのことは、今でも笑ってしまふ。

ほかにも、ゴミ拾いをしていたら、仕事に行く途中の叔父や、祖父、祖母とすれ違ったりしたこともあった。また、活動をしている中で

気づいた。一人で黙ってやっているのも楽しくないし、続かない。しかし、みんなですると、自然に会話が生まれ、笑いながらゴミを拾って、楽しくなっていく。そのループの中に私やみんなが入っていると思う。なんだかうれしく感じてきた。

あなたの身のまわりにもあるゴミ。そのゴミをただ拾うだけでいい。暇なときに何かで拾っていい。ただ、ゴミが落ちていても、見て見ぬふりをしないでほしい。私も、ポイ捨てをしないでほしい。そしてその拾ったゴミをきちんとゴミ箱に入れて、「地球に良いことをしたな」と思いながらすると、より、爽快な気分になってくる。だからあなたもまずは、ちよつとした気持ちでもいいから一つだけ、ゴミを拾ってみませんか？

受賞した
感想

電話で受賞を知ったときは「まさか!」という気持ちで、とてもびっくりしました。こんなことはめったにないので、多くの人に自分の作文を読んでもらえるのはうれしいです。

金賞

未来を救う
シュレッダーゴミの再利用

福島県 葛尾村立葛尾中学校 1年

山崎 陽向



家庭科の授業でSDGsについて学習した。持続可能でより良い世界を目指すにはどうしたらいいかを考えた。リサイクルや節電、節水は今の時代は当たり前に行わないといけない。物価も高くなり、電気もガスもガソリンも食料も何でも高くなっている。ニュースや新聞を見ても毎日値上りの報道ばかりだ。今ある資源も、このまま使っていれば将来なくなってしまうのではないかと危機感を覚えた。

私の学校は全校生徒五名のとても小さな学校だ。五人が協力し、何かできるSDGsはないかと意見を出し合った。そこで、今までにもリサイクルしてきたシュレッダーゴミを利用し、張子を作ることにした。シュレッダーゴミは、繊維が細く刻まれているためにリサイクルが難しい。焼却すると二酸化炭素が発生し、オゾン層が破壊され、結果的に地球温暖化を招く。それを少しでも解消しようと、シュレッダーゴミの再利用を家庭科の授業で考え始めたのがきっかけだ。私が小学生の頃に、中学校の先輩方からシュレッダーゴミを再利用して作った「おり」を買った。和紙で出来ているかのようなきれいなしおりで、そこに習字で文字が書かれていた。本に挟むたびに心が温かくなった。「これがシュレッダーゴミから出来ているなんて」と驚いたことを今でも覚えてい

る。どうやって作ったのか、中学生になつて一緒にシュレッダーゴミの再利用の活動ができることを私は楽しみにしていた。

今回は、全員で招き猫の張子を作ることに決めた。張子ならちよつとしたインテリアにもなるし見映えがする。張子の作り方は、シュレッダーゴミに水とおりを混ぜ、柔らかくし、ミキサーにかけてかきはんする。次に、新聞紙を丸めておいたものに猫の形を整えながら貼り付けていく。乾けば可愛い招き猫の張子が完成する。仕上げに金の墨で「福」という漢字を書き、猫の模様や顔を書き入れた。五人一人ひとりの個性が出て、いろいろな表情の猫が二十個ほど完成した。さらに支援で頂いた布で、招き猫の座布団もミシンで縫った。

早速、葛尾村の復興交流館「あぜりあ」で販売することになった。一つ100円の価格で、売上金は全額寄付する。昨年も村の社会福祉協議会に寄付したそうだ。私たちの活動で少しでも多くの人を救えたら嬉しい。シュレッダーゴミという本来捨てるゴミを再利用し、販売できたことは自分たちの自信にも繋がった。私たちでも世の中の役に立てたような気がして幸せに思った。

中学生でも協力し合えば、明るい未来へ紡いでいける。小さなリサイクルかもしれないが、この活動をずっと続けていきたい。世界中の人が少しずつでも、エコな生活にシフトしていけば十年後も、二十年後も笑顔で過ごすことができる。地球のことを考えて、環境に優しく生活することを発信していきたい。

受賞した
感想

受賞を知ったときは、驚きすぎて「ウソだな」と思いました。作文がみんなに読まれるのは少し恥ずかしいですが、自分の思いが入っているので、読んだ人がSDGsのことを少しでも考えてくれたらいいと思います。

作文が好きで、これまでも書いてきました。今回は書くにあたって、いろいろ調べて、結構苦労しました。賞をもらえるとは思っておらず「本当？」と2回聞いてしまいました。

公益財団法人 **イオンワンパーセントクラブ**

審査員からのメッセージ

審査員から作品を読んだ感想や講評をいただきました。



環境活動家

露木 志奈

私は高校の3年間、インドネシアのバリ島にある世界で一番エコな学校というわけるグリーンスクールに留学しました。

学校では、問題の解決方法を考えて行動する授業もありました。それまでは全く環境問題に興味がない

国は高校を休学して、全国の学校で講演活動をしていました。社会では学生であることがネガティブにとら

えられてしまうこともありましたが、一方で、学生でも社会は変えられるとも感じます。

皆さんの作品は、アイデアだけでなく、実践されている方が本当に多く、そのことに希望を感じました。そこで「社会を変えるのに、大人になるまで待たなくていい」というメッセージを伝えたいと思います。



教育アドバイザー 清水 章弘

私が採点基準としたことはたつたひとつ。「これから始まる」「これを続けた」という思いがにじみ出ているかどうかです。

私は中学生の時に書いた作文をきっかけに、今の仕事につきました。当時、テレビの討論番組で取り

上げていた「ゆとり教育」の内容に疑問を持ち、出演者に取材を申し込んだところ、受けてくれました。大人たちが語ったのは、「教育は人をつくり、人で社会が成り立つ」ということでした。その作文を書いたときに東京大学に興味を持

ち、教育学部に入學。大学3年生の時に会社を作りました。そして今、教育アドバイザーとして仕事をしています。

皆さんは今まさに中学生の「作文を書いた」ここからが始まりです。世の中にどんなアクションしてほしい。ぜひ今日をきっかけに次のもう一歩を踏み出してください。



朝日学生新聞社 代表取締役社長 高田 圭子

力作ぞろいでしたが、なかでも金賞の作品が特に優れていると思った点が二つあります。

ひとつは自分の言葉でつづられていたことです。例えば「ごみ拾いのボランティアや自宅のグリーンカーテン。その体験が、意義のある成

果や喜びにつながっていく結論への展開は非常に上手でした。

もうひとつは「文・文が長くない」ということです。新聞社では記事を書くための勉強会をしますが、まず挙げられるのは、「きちんとまとまった短い文章をつなげ

る」ということ。この鉄則がすでに身につけている皆さんはすごいと思いました。

筆力をさらに磨く方法は、書き上げた作文を声に出して読んでみることで、音読すると、リズムの悪さや誤字、脱字に気づくことができます。

応募してくださった皆さんに敬意を表し、さらなる飛躍を期待します。

都内をめぐりながら環境について考える!

金賞受賞者を副賞の1泊2日の環境エコツアーにご招待

表彰式を終えた受賞者たちは、東京都内の各所をバスでめぐりながら環境について考える環境エコツアーに出発しました。驚きや発見が盛りだくさんのツアーの様子をレポートします。



1日目 見学1 国立競技場周辺を散策

参加者は紅葉が見頃を迎えた明治神宮外苑イチョウ並木(東京都港区など)を歩き、都市部の樹木保全を考えました。そのまま徒歩で東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の会場となった国立競技場(東京都新宿区)へと向かいます。全国各地から森林認証を取得した木材を調達して作られた「軒庇」や環境負荷を軽減する設備などの説明を聞きながら競技場の外観を見学し、その大きさに圧倒されました。

国立競技場の向かいにある日本オリンピックミュージアム(東京都新宿区)では、さまざまな環境保全の試みがなされた長野1998大会の遺産(レガシー)が東京2020大会へと引き継がれていることを展示から学びました。また、オリンピックの身体能力に挑戦するゲームでは、体を動かして楽しみました。



こんなに大きいのか!

街の移り変わりを
知ることができました



世界的なイベントの
会場周辺で「環境
への配慮」を知る

2日目 見学1 明治神宮

初詣の参拝者数が日本一といわれる明治神宮(東京都渋谷区)。1920(大正9)年の創建にあたっては、約70万平方メートルの敷地に全国から集まった365種約12万本の樹木が植えられました。明治神宮は「永遠の社」を目指してつくられた人工林なのです。

約100年の時を経て、近年の調査で樹木は234種3万6千本であることがわかっています。これは東京の気候に合わない種類が自然淘汰されたということ。参加者は生き残った木々が大きく成長している姿を目の当たりにしました。



東京にもこんな
緑があるんだわ

木に手をあて当時の人々を思う

2日目 見学2 森美術館

ツアーの最終目的地は六本木ヒルズ(東京都港区)。商業施設、企業のオフィス、アートや学びの拠点が集まる街です。環境・省エネに配慮した街づくりをかがやけ、森タワーの最上階(53階)の森美術館では「私たちのエコロジー: 地球という惑星を生きたために」という展覧会が開かれています。「環境危機に現代アートはどうか合うのか」を感じながら、参加者はじっくりと見学していました。



循環型社会の大切
さを感じた

真珠をテーマにした作品
に圧倒されました

アートで環境危機を表現。多様な視点に気づく

1日目 見学2 植物工場見学

夕食の会場は、東武ホテルセント東京(東京都墨田区)内にあるレストラン「ヴェルデュール」です。このレストランでは、最先端の農業技術として注目されている「植物工場」を店内に設置し、約10種類の野菜を生産しています。植物工場設備は、野菜の苗を並べた6段の棚に肥料を溶かした水を循環させ、光を当てる仕組みです。無農薬・高品質なとれたて野菜がレストランのサラダバーに並びます。

参加者は植物工場の特徴を学び、未来の農業について考えました。その後は、目の前で料理長が収穫してくれた野菜を試食。「シャキシャキしていて、おいしい」ととれたての良さを実感しました。



おいしい野菜を食べながら、未来の農業を考える

2日目のまとめ/ツアーの振り返り みんなでディスカッション!

ツアーを終えた参加者たちは、環境問題に対してこれからどんな行動ができるかを改めて考えるディスカッションを行いました。

受賞者の中学生と保護者がそれぞれ2グループ、計4グループに分かれます。そして「地球環境のために今できること」をまずは個人で考え、それを共有しながらグループとして「みんなに伝えたいこと」をまとめました。

グループ発表では、「江戸時代を粋に発信」「フードロスを減らす!」などのアイデアが出されました。「日々の生活の中にできることがある」「みんなが続けたいと思った」といった積極的な感想が述べられ、環境への意識がより高まるツアーとなったことを実感しました。



公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

イオン1%クラブの活動紹介

「お客さまからいただいた利益を社会のために役立てる」という想いのもと、

イオングループの主要企業が税引前利益の1%相当額を拠出し、

子どもたちの健全な育成 諸外国との友好親善 地域の発展への貢献 災害復興支援

を主な事業領域として、環境・社会貢献活動に取り組んでいます。



子どもたちの健全な育成

環境・社会をテーマに、子どもたちが社会的なルールを学びながら身近な地域の問題を主体的に捉え、考える力を育てます。



諸外国との友好親善

学生たちに国際的な文化・人材交流の機会を提供し、相互理解を深めることで日本と諸外国との友好親善を深めます。



地域の発展への貢献

地域に根ざし、次代に引き継ぐべき伝統行事や文化の継承を支援するとともに、地域社会が抱える諸問題の解決に取り組めます。



災害復興支援

大規模災害により被災した方々が、日常の生活を一日でも早く取り戻せるよう、復旧・復興を支援しています。



写真: ロイター/アフロ

詳しくはこちら

イオンワンパーセントクラブ

検索

